

平成12年度理学系研究科技術シンポジウム実施される

9月14日午後1時より、理学部旧1号館150号室において、「第17回理学系研究科技術シンポジウム」が開催された。

このシンポジウムは、理学系研究科に所属する技術職員が日頃の業務や研究の中で得られた成果を発表する場で、毎年開催され今年で17回を迎えた。

はじめに、評議員の濱野先生の挨拶があり、引き続き各技術職員の発表に移った。今回は招待講演として教養学部共通技術室 小田嶋豊技術官に演題「カメリング・オンネス研究所で学んだこと」を講演して頂き、盛会であった。

また、生物科学石川統教授による特別講演「ゲノム解析でわかることと、わからぬこと」は、生き物の計り知れない不思議さ等、貴重な講演に興味深く聞き入った。

当日のプログラムは次の通りである。

発 表

- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1. EPMA 用カーボン蒸着装置の開発等、技術業務のまとめ | 立川 統 (地球惑星科学) |
| 2. 分類標本園の整備・管理 | 出野 貴仁 (附属植物園本園) |
| 3. メダカを用いた生殖細胞突然変異成立機構の解析 | 島田 敦子 (生物科学) |
| 4. 2 K C C Dチップの表面形状の測定 | 樽沢 賢一・吉田 重臣
(天文学教育研究センター木曾) |
| 5. 三崎臨海実験所周辺の生き物たち | 関藤 守 (附属臨海実験所) |

招待講演

- | | |
|---------------------|-------------------|
| カメリング・オンネス研究所で学んだこと | 小田嶋 豊 (教養学部共通技術室) |
|---------------------|-------------------|

特別講演

- | | |
|---------------------|----------------|
| ゲノム解析でわかることと、わからぬこと | 石川 統 教授 (生物科学) |
|---------------------|----------------|

シンポジウム終了後、懇親会が行われた。近藤教授による乾杯の挨拶のあと、石川教授、小田嶋技術官を交え、和やかに歓談し、技術職員の親睦を深め盛会に終わった。

技術職員研修「極微小領域の分析技術関係」が実施される

10月24日（火）から10月26日（木）までの3日間にわたり、平成12年度東京大学技術職員研修のひとつである「極微小領域の分析技術関係」が昨年に引き続き理学部・理学系研究科で実施された。

これは全学の技術職員に対し、極微小領域分析技術の基礎を習得させ、資質の向上を図ると共に、技術の継承を目的に企画された研修である。この研修には今年も受け入れ定員を越える申し込みが全学からあった。今回は、3部局7名が受講し、会場は5号館の地球惑星科学専攻セミナー室で行われた。

開講式は小間研究科長を迎えて行い、講義は地球惑星科学専攻の教官をお願いし、二日目の午前中まで7つ講義が行われた。二日目の午後からは実習に移り、地球惑星科学専攻の立川 統・吉田英人技術官が担当し、走査型電子顕微鏡（SEM）で桜島火山1914年の大正溶岩を観察しながらエネルギー分散型X線分光器（EDS）で定性・定量分析の実習を行い、波長分散型X線分光器（WDS）で浅間火山1783年の天明の噴火の溶岩と納沙布岬貫入岩について点・線・面分析が行われた。さらに透過型電子顕微鏡（TEM）を用い、開聞岳火山のかんらん石の電子線回折像及び超高分解能像を得る実習が行われた。研修生は、様々な分析機器に戸惑いながらも実習の課題をこなした。

最後に佐藤評議員を迎えて閉講式を行い3日間の充実した研修を終了した。

なお、講義の内容はつぎの通りである。

TEM, SEM による極微小領域分析の必要性

村上 隆 教授

TEM の結像理論と結晶構造解析

小暮敏博 助教授

新しい結晶学（五角形のふしぎ）

杉山和正 助教授

太陽系形成過程解明に必要な極微小領域分析について

高橋（永原）裕子 助教授

EDS, WDS の原理と分析時の注意点

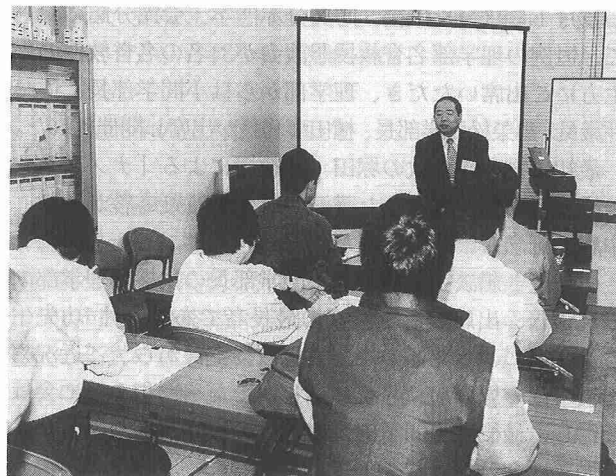
吉田英人 技術官

試料作成法

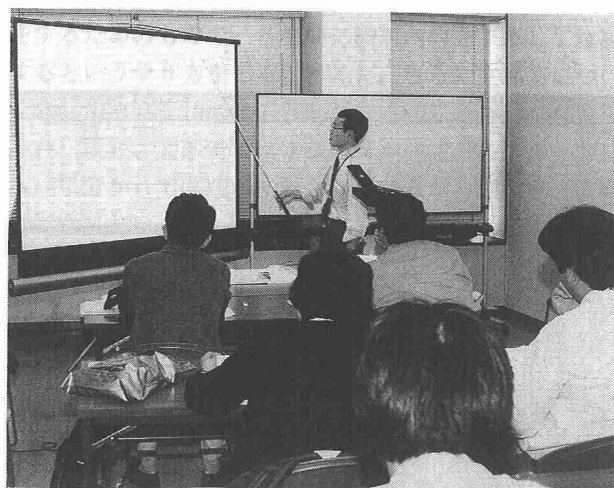
立川 統 技術官

分析試料の予備知識

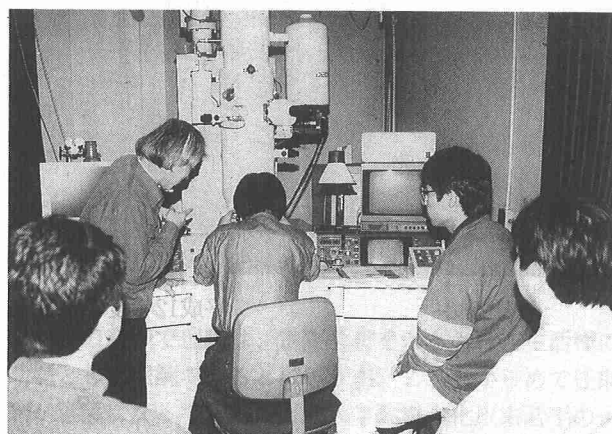
立川 統 技術官・吉田英人 技術官



開講式で挨拶を行う小間研究科長



講義のようす



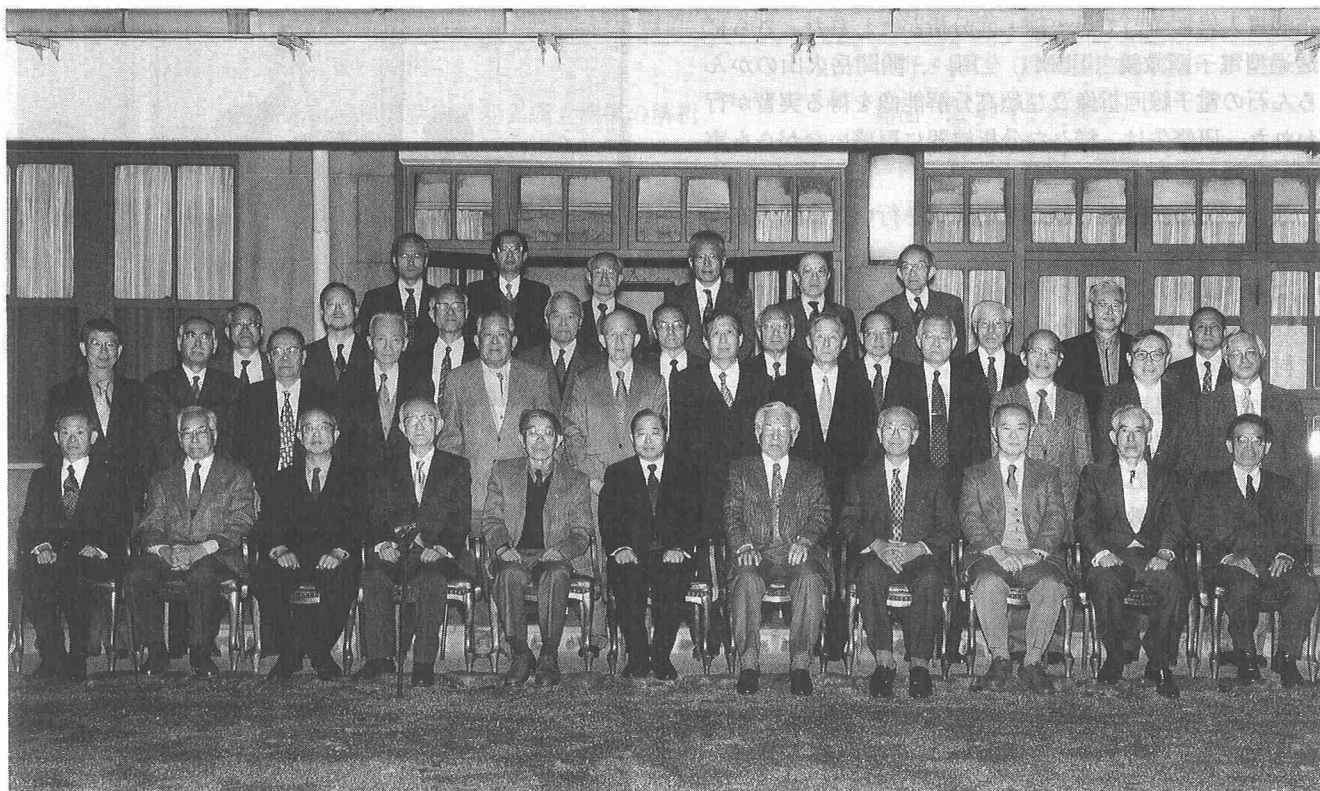
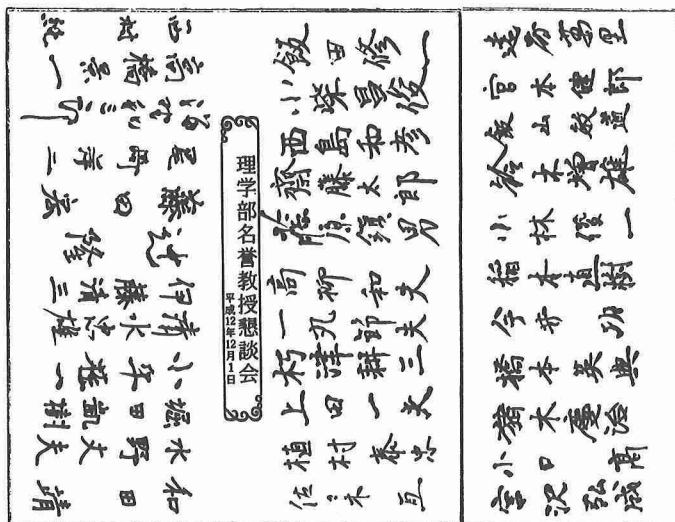
実習のようす

平成12年度理学部名誉教授懇談会開催される

12月1日（金）午後5時30分赤門学生会館分館において、恒例の理学部名誉教授懇談会が34名の名誉教授の先生方にご出席いただき、理学部からは小間学部長、佐藤評議員、壽榮松元学部長、植田事務長が出席し開催された。

最初に物理学専攻の塚田 捷教授による「ナノスケール構造の科学」と題した講演が行われ質疑応答があり、中庭で記念撮影が行われた。

引き続き懇談会に移り、小間学部長の挨拶と理学部の近況報告、出席の名誉教授の最長老である今井 功先生のご発声による乾杯の後、名誉教授全員から、ご近況や現役時代の思い出話等をお話いただき、和やかに会は進行し、最後に小間学部長の閉会の挨拶があり、午後8時過ぎ散会となった。



平成12年度理学部名誉教授懇談会 H12.12.1

理学系研究科長（理学部長）と理学部職員組合との交渉

2000年10月2日に小間研究科長、植田事務長と理学部職員組合（理職）との間で定例研究科長交渉が行われた。主な内容は以下のとおりである。

1. 昇格改善等について

10月の交渉で理職は、7月に明らかになった、2000年度行（一）昇格に関する理学部当局の尽力について、謝意を表明した。

理職は事務官の2001年度昇任要求等に関する本部人事課と理学部のヒアリングの日程を尋ね、事務長は、理学部は10月26日の予定であると答えた。理職は、4級から5・6級への昇格が非常に厳しい状況であり、特に女性のたまりこみの解消に取り組んでいただきたいと要求し、後日事務職員の昇任要望者のリストを提出した。

理職は、理学部の技術部が発足して9年になるが、技術職員に定員削減のしわ寄せがおしつけられ、今後の技術部のあり方など、真剣に考える時期に来ているので、できれば技術委員会の教官メンバーとも率直に当面する問題について、意見交換したいと申し入れた。科長は、研究重点大学の技術部のあり方など検討する必要は感じている、また技術職員の定員削減問題は人事委員会に考えてもらっていると答えた。

理職は、今年度5級に昇格した図書職員については、定年が近いため6級昇格へ早急に取り組んでいただきたいと要望した。理職は、現在、図書職員の待遇を専門職にふさわしい待遇にと取り組んでおり、東大、文部省が認めるところまでできたが、人事院が認めていない状況を訴えた。科長は、図書職員の待遇に問題があることはよく認識しており、技術系職員のいる部局の全学的な会議（年に1、2回開催）の席上でも、話題になっている、教官にとっては現場資料に精通した図書職員が最も有用であり専門性が高いと考えているが、人事院の認識はそうではないようだと言った。理職は、自然科学系分野ではオンラインジャーナル化も先行しており、こういった専門性を処遇面でも反映させてほしいと要望した。科長はオンラインジャーナルが充実してきて理学部は雑誌関係が十分良くなってきた、電子化により業務の高度化が進んでいるので、図書の専門性についてもふさわしい評価がなされるべきであると考えている、一方学科図書室は規模が小さいので待遇改善のためには何らかの工夫が必要であろうとの認識を示した。

理職は、2001年度概算要求で、理学部の事務機構がどう扱われているか尋ねた。事務長は、1部3課で要求し

ているが、実現性は低いようだ、その中で図書は2掛にしてシフトアップする形で要求を出していると答えた。

2. 国立大学の法人化について

10月の交渉で理職は、この間の文部省、国大協、東大の動きについて尋ねた。科長は、東大では総長の私的諮問機関である「制度研究会」が7月に中間報告を出し、10月初旬には最終報告が出る予定であるが、その報告は東大の正式の意志決定とは関係がないと答えた。さらに科長は、今度、評議会の下に法人化問題と関連して東京大学のあり方を検討する懇談会を置くことになり、座長は総長があたり、両副学長、研究所長、学部長、事務局長等がメンバーとなる、その下に個別の問題ごとにワーキンググループを置き、そこには総長補佐、元総長補佐も加わる、この懇談会は東京大学として正式の意志決定をするためのもので、各部局に検討内容を下ろして議論するというやり方をとると答えた。さらに文部省については、法律案を2002年の春あたりに出したい意向だと思われ、現在、文部省では4つのグループ（各グループ15人）に分かれて問題が検討されているが、国大協、直轄研究所においても、同様のグループに分かれて検討がおこなわれている、文部省の検討会は各グループが月1回のペース（全体では毎週1回のペース）で議論されている、最初の3～4回は基本に立ち返った議論から始めているようだと言った。

理職は、東大の懇談会での検討内容は各部局に下ろされることだが、この問題は職員や助手にもかかわる問題であり、東大の正式の意志決定につながるものもあり、教授会メンバーだけでなく、職員や助手の意見も反映させる仕組みが必要だ、何らかの方法を検討していただきたいと要求した。科長は、助手の方々については拡大教官集会などの場を設けることで対応できるかもしれない、職員の方々については意見を聞く何らかの仕組みが必要だろうから懇談会でその旨意見として述べたいと思う、と言った。

3. 教官の定年延長問題について

10月の交渉で理職は、定年延長そのものは、生活権の問題として理解できると思うが、これとからめて任期制が議論になっていること、大学院重点化以来若手のポストが減少しており、若手にますますしわ寄せが来る可能性があること、職員の定年延長問題が置き去りにされた形になっていること、の3点は問題である、とくに任期制の問題は、導入を進めている部局もあると聞が、大変危険な動きだと考えている、もともと筋の違う問題

であり、慎重な対応をお願いしたいと要望した。科長は、任期制の導入については慎重に対応したい、定年延長問題に関して理学部では、60歳で出ていくことを励ますような仕組みが必要だということ、研究室の長として留まるのではなく、経験を活かして教育面で活躍していただくなどの方法を考えること、の2点が議論として出ていた、任期制については、定年が延びた場合に60歳で辞めようとする、と勧奨退職扱いにならないことへの対応として、「便法」としてでてきた面があると答えた。

理職は、現行の規則でも、勤続年数等によっては定年前でやめても勧奨退職扱いとなる規定があると聞いていると述べ、科長は資料があればいただきたいと答え、理職は後日手渡した。理職は、任期制を入れるかどうかは、各部局で勝手に決められるのか、各専攻ごと、あるいは大講座ごとに決めることもできるのか尋ねた。科長は、部局からの提案により評議会で決定することになっており、このとき、特定の分野や講座に任期制を入れるよう提案することもできる、と答えた。

4. 定員削減について

10月の交渉で理職は、定員削減について尋ねた。科長は、第9次定員削減の2001年度分については、定年者を含め、3名となっている、第10次がすでに2001年1月から5年間、約5.1パーセントきており、9次より厳しい状況である、と答えた。

5. その他

(1) 勤勉手当について

10月の交渉で理職は、2000年夏の人事院勧告で、12月の勤勉手当が、0.6ヶ月から0.55ヶ月に減らされることになったが、東大ではこれまでの差別支給0.7ヶ月と0.6ヶ月を今後どのように扱うのかを尋ねた。事務長は、まだ法案は通過していないが、そうなれば、0.65ヶ月と0.55ヶ月にして、0.1ヶ月の差を付ける方針と聞いていると答えた。

(2) 特別昇給について

理職は、2000年7月の特別昇給者の人数を尋ね、事務長は、今回は教職員会わせて、51名であると答えた。理職は、2000年度の特昇から、技術専門官と技術専門職員の扱いが役職者扱いとなった点について尋ねた。事務長は、技術専門官と技術専門職員はこれまで、部局長の専決であったが、今年度から、総長の専決となった、一般職及び技官3級までが部局長の専決で、掛主任以上及び技術専門官・技術専門職員は部局の推薦を受けて、総長の専決となると答えた。

(3) 理学部1号館の2期工事について

理職は、実現の可能性について、情報があるか尋ねたが、科長はまだ何とも言えない。五分五分と思う、と答えた。



人事異動報告

(講師以上)

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
地 惑	助教授	小 池 真	12. 10. 16	転 任	名古屋大学より
スペクトル	〃	岡 本 裕 巳	12. 11. 1	昇 任	岡崎国立共同研究機構教授へ
地 殻	〃	鍵 裕 之	12. 11. 16	〃	講師より
天文セ	〃	土 居 守	〃	〃	天文学助手より
物 理 教 授		折 戸 周 治	12. 11. 14	死 亡	
天文セ	助教授	長谷川 哲 夫	12. 12. 1	昇 任	国立天文台教授へ

(助 手)

生 科 助 手		出 村 拓	12. 9. 30	辞 職	
物 理	〃	黒 木 和 彦	12. 10. 1	昇 任	電気通信大学助教授へ
〃	〃	有 田 亮太郎	〃	採 用	
〃	〃	柳 瀬 陽 一	〃	〃	
〃	〃	佐々木 勝 一	〃	〃	
化 学	〃	福 沢 世 傑	〃	〃	
地 殻	〃	角 野 浩 史	〃	〃	
天文セ	〃	宮 田 隆 志	〃	〃	
化 学	〃	遠 田 浩 司	〃	休職更新	13.9.30 まで

博士（理学）学位授与者

平成12年 9 月25日付学位授与者（10名）

種 別	専 攻	申 請 者 名	論 文 題 目
論文博士	物 理 学	新 井 宗 仁	タンパク質のフォールディングの速度論的研究
〃	地球惑星 科 学	宮 本 英 昭	流体流動を伴う地球型惑星表層地形の形成
〃	地球惑星 科 学	小 竹 美 子	GPS データ解析に基づく西太平洋のテクトニクスの研究
課程博士	情報科学	高 木 啓 伸	知的ユーザインターフェースの実現に向けた視線パターンの解析と検証
〃	物 理 学	齊 藤 晶	ガラス中ゲルマニウム微粒子の光学的性質
〃	物 理 学	中 西 剛 司	$\text{Sr}_{14-x}\text{Ca}_x\text{Cu}_{24}\text{O}_{41}$ の圧力誘起超伝導状態に関する実験的研究
〃	地球惑星 科 学	中 田 隆	対流圏の鉛直微細構造に関する研究
〃	地球惑星 科 学	中 野 英 之	海底境界層モデルを組み込んだ海洋大循環モデルによる深層循環の研究
〃	化 学	宮 田 佳 樹	負イオン質量分析法の地球化学的研究応用：海洋試料中のルテニウム定量法の開発と大気中のホウ素同位体比に関する研究
〃	生物化学	平 本 正 輝	ショウジョウバエネトリン受容体フラッツルドはネトリンの局在制御を介し軸策ガイダンスを行う

平成12年 9 月29日付学位授与者（12名）

課程博士	情報科学	戸 次 大 介	構成的言語理論のための型付き動的理論
〃	情報科学	シュタイナー・ローランド	HPSG 等の単一化文法における文法外入力 of 頑健な処理のための規則駆動型構文解析戦略
〃	物 理 学	玉 川 徹	^9Be (K^- , K^+) 反応を用いた準自由 E^- 生成の研究
〃	物 理 学	中 野 讓	円筒型検出器系を用いたダブルラムダハイパー核の実験的研究
〃	物 理 学	上 杉 智 教	シンクロトロンにおける空間電荷効果による半整数共鳴の実験的研究
〃	地球惑星 科 学	鬼 澤 真 也	地震波速度構造解析から推定した伊豆大島火山のマグマ供給システム
〃	地球惑星 科 学	滝 川 雅 之	成層圏硫酸エアロゾルの気候変動に及ぼす影響について
〃	地球惑星 科 学	小松原 純 子	下部中新統野島層群の堆積相解析にもとづく日本海拡大初期の淡水堆積盆の発達
〃	化 学	アリボ・ディア・ソット	海水中の希土類元素：粒子反応性、Ce異常、および水塊の地球化学的キャラクターゼーション
〃	生物科学	阿 部 渉	ニセトゲクマムシ属および近縁属（緩歩動物門：ヨロイトゲクマムシ科）の系統分類学的研究
〃	生物科学	小 泉 好 司	維管束分化の空間的制御に関する遺伝学的研究
〃	生物科学	三 澤 計 治	多数の OTU と遺伝子座を用いた分子系統解析に関する理論的研究

平成12年10月16日付学位授与者（1名）

課程博士	情報科学	日 置 尋 久	適応的光投影法による三次元シーン計測
------	------	---------	--------------------